子供のころ「遊び人」を夢見た人が故郷と家族を捨てて旅立ち「設計者」になる物語を一つ作ってくれる？

テーマ：「迷い」「孤独」

設定：

・テーマや重要な言葉が直接的に現れないタイトルにして

・登場人物の名前は工学に関する難しいが短い言葉を使って

・主人公の名前はテーマを内包する名称を使って

・ハッピーエンドにはしないで

・舞台は天国と地獄

・天国が持つメッセージは「秩序」「権利」

・地獄が持つメッセージは「混沌」「平等」

・設計者に関する情報は最初には出てこないようにして

・物語の最中にいろんな出来事があって主人公が徐々に大切な事を悟る展開にして

・終盤に主人公が自分自身が「設計者」になった事実に気づく展開にして

決める事

・遊び人とは？

・設計者とは？

・天国のルールとは？

・地獄の哲学とは？

・主人公が地獄へと旅立った理由は？地獄に行けば自由になれる？

・主人公の成長環境は？

-------------------------------------------------------------------------------------------------------

１．

物語のタイトル: 「対比の彼方」

この物語の主人公は、「デルタ」です。天国で育った彼は、その世界が「秩序」であり「権利」の差があることに疑問を感じていました。子供の頃から彼は「遊び人」になることを夢見ていました。それは、自由に、平等に、思うがままに生きることを意味していました。

デルタはその思いを胸に、故郷の天国を離れ、地獄という未知の世界へ旅立ちます。地獄では「混沌」と「平等」が支配しており、遊び人としての生活は彼の心を満たしていました。しかし、同時に彼は迷いと孤独を深く感じるようになりました。混沌と自由が支配する地獄では、誰もが等しく存在している一方で、誰もが孤独であることに彼は気づくのです。

彼の心の中では「秩序」と「混沌」、そして「権利」に対する「平等」が対比となっています。そして彼はそれらの間で揺れ動き、何が自分にとって重要なのかを徐々に悟ります。その中でデルタは「設計者」という存在に気づきます。

「設計者」とは、自分自身の世界を作り出す者で、その世界は彼の選択と想いの結晶です。彼は自分自身が「設計者」であり、自分の理想とする世界を創り出すことができるのだと気づきます。

しかし、その気づきと共に彼は、自分自身の孤独と迷いが彼の創る世界に影響を与え、完全なものを創り出すことはできないという事実に直面します。

物語は、デルタがこの真実を受け入れ、完全ではない自分の世界を創り続けていく様子を描きながら、ハッピーエンドではない終わりを迎えます。

２．

物語のタイトル: 「断線の光景」

主人公の名前は「デルタ」、世界を旅する孤独な若者で、子供の頃から「遊び人」を夢見て育つ。彼の故郷は「天国」、そこは美しく整った世界で、秩序と権利が高い価値を持つ。しかし、デルタはそこでの生活に疑問を感じ、身一つで故郷を飛び出す。

新たな舞台「地獄」へと足を踏み入れると、そこは混沌と平等が支配する世界だった。初めて自由に遊べる環境に浮かれるデルタだったが、全てが混ざり合い方向性が見えない世界に次第に迷いを感じ始める。また、平等なだけに誰もが同じように存在し、誰もが孤独であることを痛感する。

そんな彼の前に現れるのは、名前を「ベクトル」、地獄を闊歩する一匹狼。彼はデルタに「物事には全て自分で意味を持たせることが重要だ」と教える。デルタはその言葉を胸に、自分自身が求める世界を創る「設計者」へと自身が進化していく。

しかし、デルタの作り出す世界は完全なものではなく、彼自身の迷いと孤独が深く反映される。しかし彼はそれを恐れず、自分の限界と向き合いながら、新たな世界を設計し続ける。

物語はハッピーエンドには至らず、デルタが自分自身が「設計者」になったという事実を受け入れ、孤独と迷いを抱えながらも新たな世界を創り出す様子で締めくくられる。

３．

物語のタイトル: 「光と影の狭間で」

主人公は「イプシロン」という名の青年です。彼は天国の世界で育ち、秩序と権利に縛られた世界に不満を抱いていました。自由を夢見る遊び人の心を持つ彼は、人間の本質を探求する旅に出る決意をし、故郷と家族を後にします。

その旅先は混沌と自由が溢れる地獄でした。そこでは誰もが平等であり、秩序や権利は関係ない世界で、イプシロンは初めて本当の自由を体験します。彼はその中で深い迷いと孤独を感じつつも、自由な遊び人としての日々を満喫します。

しかし、いつしか彼はその混沌の中に何か秩序を見つけ始めます。そして、彼は自分自身がその秩序を設計する「設計者」であることに気づくのです。

物語はイプシロンが新たな秩序を作り出す試みを描きます。彼の迷いと孤独は、新たな秩序の設計に影響を与え、それは完全なものではないにせよ、彼自身の成長とともに形成されていきます。

物語はハッピーエンドではありません。イプシロンは自分自身が設計者であることを理解し、自分の内面を理解しようと試みますが、それはまだ完全ではなく、彼は迷いと孤独を抱えながらも新たな秩序を設計し続けることを決意します。

物語の終わりでは、イプシロンが自由と混沌の中で自己の迷いと孤独を理解し、新たな世界の設計者としての道を選んでいく様子を描きます。

-------------------------------------------------------------------------------------------------------